

松本美希

今回はフィンランドの教育における変化、を中心にお伝えしたいと思います。

最近フィンランドの学校、主に小学校や中学校では、授業が「教科ごと」ではなく「トピックごと」に行われるようになる、といった変化が起こっています。

これは今まで英語、数学、地理・・・というように授業時間が分かれていたのが、例えば「カフェテリアの運営をしてみよう」といったように、実際の働く場でありそうなトピックごとに授業が行われるようになり、より科目横断的な授業が増える、というものです。カフェテリアのプロジェクト例で言えば、プロジェクトを通してメニューの原材料の産地や売上の計算、多言語によるメニュー表記を考えることになるので、従来の地理、算数、英語といった教科が扱っていた内容を学ぶことができます。またトピック学習は多くの場合グループ活動で行われるため、活動を通して生徒たちのコミュニケーションスキルや他者とコラボレーションする能力を向上させることも期待できます。

この改革に携わったヘルシンキの担当者は、こうした改革は、変化に富んだ21世紀の現代社会に生きる子どもたちに、単にテストを切り抜ける力ではなく、彼らにとって必要な今日、そして明日を生き抜く力を身につけさせることをねらって行われたのだと語っています。学校で習う知識はそれ自体が目的なのではなく、実社会の中で問題解決、価値創造をしていくための手段に過ぎないのだというというメッセージが感じられます。

フィンランドのこうした教育に対する姿勢は、私が今受講中の授業からも感じることができました。授業のタイトルは“**Study Skills in Deep Learning**”というもので、深い学びを実現するためにはどのような方法が望ましいのか、ということケーススタディをもとに考えていきます。このケーススタディ等、具体的な問題に対するアプローチをグループで考えていく、という手法は**Problem-based learning**と呼ばれていて、この方法は知識がより定着しやすくなったり、問題解決能力が向上したりといった長所があるそうです。ちなみにこの授業を担当されている教授は、フィンランドの学校の先生方に、教え方を指導されているそうです。

以上の点から私が理解したのは、フィンランドにおける「教育」は、ほとんどの場合において、実社会に還元されることを前提として行われている、ということ。上記の例以外にも、職業選択が主に大学での専攻に基づいてな

れていることなどから、勉強は実社会に役立つべきもの、という意識がフィンランドの教育全体に浸透していることが伺えます。

この点は日本と対照的であるように私は考えています。というのは、日本ではたびたび「大学は職業訓練校ではないのだから、実生活や仕事に役立つ知識に傾倒するのではなく、幅広く教養を身に付けるべきである」という主張をよく耳にするためです。日本でも「生きる力」が現行学習指導要領の中で強調されていますが、これは大学教育の話となるとまた話は変わり、「役立つ学習」というものがネガティブに捉えられることがあるように感じます。フィンランドの大学は教育やデザインなど、実社会での応用を前提とした分野に秀でているのも一因なのでしょうが、小学校～高校における教育方針と大学における教育方針の違いが日本はフィンランドと比較すると大きいように感じます。

以上、実生活や仕事での応用を重視するフィンランドの教育についてのお話でした。

ヘルシンキ大学への留学に際して機会をいただいた21会サイトでのエッセイ執筆も今回が最後です。4回にわたってお付き合いいただきありがとうございました。



市内のカフェ。暖かくなってきた日はカフェのオープンテラス席が大人気。



オーロラ。うっすらとですが運良く家のバルコニーから見る事ができました。



ストックホルムの景色。お隣スウェーデンはフェリーで行くこともできる、人気の旅行先です。



自室の窓から。日本では桜が咲く季節に、ヘルシンキでは雪が降りました。



ヘルシンキ現代美術館(通称キアズマ)。約半年間の休館を経て、最近リニューアルオープンしました。建物のデザインも素敵です。